

先週私たちは、「神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならない」ということを見ました。それは、難行苦行の結果、救われるという意味ではなく、主イエスの恵みによって救われた者は、主の証人として歩むゆえに、反対者たちからの苦しみ避けられない、ということでした。でも、愛のうちに私たちを選び、神の国に入れることを望んでおられる主は、ご自分の霊（聖霊）とみことばによって私たちの心を強くすることで、いかなる苦しみの中にあっても、私たちが最後まで主に信頼できるように助けて下さるのです。そのようにして主は私たちを神の国へと迎え入れて下さいます。

第一回伝道旅行を終えたパウロとバルナバは、シリアのアンテオケに戻ったわけですが、彼らがそこでしばらく滞在している間に、ある問題が起こるのです。「激しい対立と論争」や「激しい論争」といった、教会ではあまり聞きたくない言葉が、今日の箇所には記されています。まずここで知っておきたいことは、その対立や論争が、クリスチャンの間（教会）で起こった、ということです。つまり、それは、主イエスを信じる者とそうでない者との間ではなく、「主を信じる」という者同士の間で起こりました。

1-2節「さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、『モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない』と教えていた。そしてパウロやバルナバと彼らとの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバと、その仲間のうちの幾人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった」。

この発端は、ある人々がユダヤから、つまり、彼らはユダヤ人のクリスチャンだったわけですが、彼らがアンテオケに来た時に問題が起こりました。モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、つまり、ユダヤ教に改宗しなければ救われない、と彼らが教えたからです。その教えに対して、アンテオケ教会の指導者であり、異邦人の使徒として立てられたパウロとバルナバが異議を唱えることで、彼らの間に対立が起こりました。

ただパウロもバルナバも、もともとはユダヤ教徒です。パウロにおいては、パリサイ派の中の超エリートでした。ですから、このユダヤから下って来た人たちが、なぜそのように主張しているかをパウロは当然、理解していたのです。だからこそ、その間違った教えが、広がらないよう、ユダヤの教会の中できちっと話し合われる必要を覚えたので、彼らは仲間たちと共にエルサレムに上ことにします。

3節「彼らは教会の人々に見送られ、フェニキヤとサマリヤを通る道々で、異邦人の改宗のことを詳しく話したので、すべての兄弟たちに大きな喜びをもたらした」。アンテオケからエルサレムに上るため、彼らは陸路を使ったわけですが、その道中のフェニキヤとサマリヤで、その兄弟たち、つまり、ユダヤ人やサマリヤ人たちに、異邦人たちの救いについて話します。すると、そのことは彼らに大きな喜びをもたらすのです。

さて、エルサレムに着いたパウロたちは、教会と使徒たちと長老たちとに迎えられます。そして、神様が彼らとともにいて行われたことを報告するのです。その時、パリサイ派の者たちで信者になった人々が立ち上がって言いました。5節「しかし、パリサイ派の者で信者になった人々が立ち上がり、『異邦人にも割礼を受けさせ、また、モーセの律法を守ることを命じるべきである』と言った」。この問題について検討するため、使徒たちと長老たちとは集まるわけですが、そこで再び激しい論争が起こります。

ここでパリサイ派の者で信者になった人々の主張について見てみましょう。彼らの主張はこうです。「異邦人が救われるには、モーセの慣習に従って割礼を受け、律法を守らなければならない」。つまり、異邦人が救われるには、主イエスを信じるだけではなく、ユダヤ教に改宗すべき、そのようにして、ユダヤ人のような生き方をすることが必要だと彼らは教えたのです。

一方、パウロとバルナバは、その必要はなく、主イエスを信じるだけで救われる、と教えました。つまり、救いは、主イエスの恵みによってもたらせるものであり、それに人の行いを付け加えてはいけない、と主張したのです。そこでこの両者の間で激しい論争が起こったわけですが、その後でペテロが語り始めます。

7-11 節「激しい論争があつて後、ペテロが立ち上がって言った。『兄弟たち。ご存じのとおり、神は初めのころ、あなたがたの間で事をお決めになり、異邦人が私の口から福音のことばを聞いて信じるようにされたのです。8 そして、人の心の中を知っておられる神は、私たちに与えられたと同じように異邦人にも聖霊を与えて、彼らのためにあかしをし、9 私たちと彼らとに何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。10 それなのに、なぜ、今あなたがたは、私たちの父祖たちも私たちも負いきれなかつたくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みようとするのです。11 私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じますが、あの人たちもそうなのです。』」。

ペテロは何と言っていますか？救われるためには、主イエスを信じるだけでは不十分で、それにプラスして律法を守り行ふべきだと言っていますか？いいえ。この「初めのころ」とは、イタリア隊の百人隊長コルネリオとその家族や友人たちのことですが、ペテロは、その彼らが救われたのは、福音のことばを聞いて信じたからだというのです。割礼も律法も行ふことなく、ただみことばを聞いて信じることで、神様は彼らの心をきよめられました。では、彼らが救われたという証拠はどこにあったのでしょうか？それは聖霊です。神様は、ペテロからみことばを聞いて信じた彼らに、聖霊を与えることで、そのあかしをされました。

ペンテコステの後、その聴衆がユダヤ人たちの時には、ペテロは、悔い改めて、主の御名によってバプテスマを受けることで、賜物として聖霊が与えられると語りました。でも、異邦人の時には、彼らは洗礼を受ける前に、聖霊を受けたのです。神様は、そのようにして異邦人たちの救いを確かなものとされました。このことは、以前、エルサレムの使徒たちやユダヤの兄弟たちがペテロを非難した時に、ペテロが語ったことと基本的には同じといえます。つまり、神様がなされることを誰が妨げることができるか、ということです。

ペテロは言います。「私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じますが、あの人たちもそうなのです」。つまり、ユダヤ人にしても、異邦人にしても、人が救われるのは、主イエスの恵みによるということです。それは割礼や律法を守ることによってではありません。なぜなら、律法を完全に守れる人など一人もいないからです。そのことはユダヤ人たちの父祖たちも同様で、彼らはそのくびきを負えませんでした。ですから、その律法のくびきを異邦人たちの首にかけることは、実に神様ご自身を試みることなのです。

12 節「すると、全会衆は沈黙してしまった。そして、バルナバとパウロが、彼らを通して神が異邦人の間で行われたしるしと不思議なわざについて話すのに、耳を傾けた」。ペテロのことばを聞いた会衆は、みな黙ってしまいます。そして、バルナバとパウロの話すことば、つまり、主が彼らを通して異邦人の間で行われたしるしと不思議なわざについて人々は耳を傾けるのです。内容について、ここには記されていませんが、これまで見たように、キプロス島で地方総督セルギオが救われたこと、アンテオケ、イコニオム、ルステラ、デルベでユダヤ人も異邦人も信じる者がみな救われたこと、また反対者たちからの迫害やパウロが石で打たれたことなどがそうでした。そして、彼らが話し終えると、今度は主の兄弟のヤコブが話し始めるのです。

13-21 節「兄弟たち。私の言うことを聞いてください。14 神が初めに、どのように異邦人を顧みて、その中から御名をもって呼ばれる民をお召しになったかは、シメオンが説明したとおりです。15 預言者たちのことばもこれと一致しており、それにはこう書いてあります。16 『この後、わたしは帰って来て、倒れたダビデの幕屋を建て直す。すなわち、廢墟と化した幕屋を建て直し、それを元どおりにする。17 それは、残った人々、すなわち、わたしの名で呼ばれる異邦人がみな、主を求めるようになるためである。18 大昔からこれらのことを知らせておられる主が、こう言われる。』19 そこで、私の判断では、神に立ち返る異邦人を悩ませてはいけません。20 ただ、偶像に供えて汚れた物と不品行と絞め殺した物と血とを避けるように書き送るべきだと思います。21 昔から、町ごとにモーセの律法を宣べる者がいて、それが安息日ごとに諸会堂で読まれているからです。」

この「シメオン」というのが、最初、誰かと思いましたが、注解書にはペテロのユダヤ名とありました。ですから、ヤコブは、異邦人たちの救いについて語ったペテロの説明をもとに、預言者たちのことばもそれと一致すると言って、アモス 9:11-12 から引用するのです。その内容は、神様が、やがて帰って来て、倒れたダビデの幕屋としてのイスラエルを立て直されること、それによって、残った人々、すなわち、神の名で呼ばれる異邦人たちがみな、主を求めるようになる、というものでした。

ですから、異邦人たちの救いは、初めから神様の救いのご計画の中にあつたのです。そして、神様は、彼らが律法を行うことによってではなく、福音を聞いて主を信じることによって、つまり、主イエスの恵みによって救われるようにされました。では、ユダヤ人たちの救いは、それとは違うものなのか？ペテロたちユダヤ人クリスチャンたちは、律法を守ることにプラスして、主イエスを信じたから救われたのですか？いいえ。彼らもまた、主の恵みによって、主を信じる信仰によって救われたのです。では、なぜヤコブは、その後、幾つかのことを避けるように言ったのでしょうか？それは異邦人たちを悩ますことではないですか？

「偶像に供えて汚れた物、不品行、絞め殺した物と血」とは、ユダヤ人たちにとって何を意味していますか？ヤコブは、「昔から、町ごとにモーセの律法を宣べ伝える者がいて、それが安息日ごとに 諸会堂で読まれているから」ということを、それらを避ける理由としてあげています。つまり、ユダヤ人たちにとって、それらは明らかに罪であつたわけです。神様がそれらを忌み嫌われることを彼らは知っていたので、それらを避けていました。もしそこで異邦人クリスチャンたちが、そんなことはお構いなしに、それらを食べ、不品行をしていたらどうですか？間違いなく、ユダヤ人たちは心は、彼らに対して心を閉ざすことでしょう。

そういう意味で、偶像の神に関係する食べ物や、絞め殺すことでそのいのちである血を残したままで動物を食べたり、その血自体を食べることは避けるべきものだったので。また不品行とは、近親相姦を初め、神様が定められた秩序以外で行われる性的罪を意味しますが、それらは明らかに人を神様から離れさせるものです。それゆえに、それらを避けることは異邦人クリスチャンにとっても、またユダヤ人クリスチャンやまだ主を信じていないユダヤ人にとっても益であつたといえます。

ですから、これらは救われるための条件ではないのです。それは主の恵みによって救われた者が、自分自身と他者のために避けるべきものであつて、その背後には、つまりきを与えないためという愛の配慮がありました。ということは、このエレサレム会議において、使徒たちと長老たちは、異邦人たちの救いを正式に認めたということです。その救いが、主への信仰にプラスして、人のわざによるものではなく、ただ主イエスの恵みによって、それを信じる信仰によって与えられる、と彼らは公に認めました。

では、いかがですか？あなたは、主の救いをそのように理解しておられますか？あなたが救われたのは、ただ主の恵みによってですか？それとも、主の恵み、プラス、あなたの行いによってですか？「ただ主イエスの恵みによって」ということは、その恵みがなければ、つまり、もし主が罪人をあわれみ、ご自分の方から働きかけて下さることがなければ、私たちは誰もこの救いに預かれない、ということです。そこには、私たち側の言い分をもってきて、自分は正しい人であるとか良いことをしてきた、ということとは関係ない。それゆえに、誰も自分に関して生まれや育ち、経歴や持ち物などをもってきて、主の前に自分を誇れないのです。

私たちは、父なる神様が、この世の基の置かれる前から、御子イエスにあつて愛のうちに私たちを選び、時至って召し出して下さつたので、主の福音を聞いた時、それを信じることで、主の恵みによって救われました。そのようにして主との愛の交わり（関係）に入れられたのです。なぜ愛なんですか？それは主が、罪人である私たちを赦すため、神様のさばきをご自分が代わりに受けて下さつたからです。主は、私たちのために、神のあり方を捨てて人となり、十字架にかかって贖いの死を遂げて下さつたのです。それが愛でなくて何ですか？主は、三日目に死よりよみがえり、ご自分を信じる者に罪の赦しだけでなく、永遠のいのちを約束しておられますが、それほどまでに私たちを愛し、天国に迎えることを御心として下さっています。私たちをして、行いによらず、ただ主イエスの恵みによって彼を信じるだけで救われるのは、そのためです。